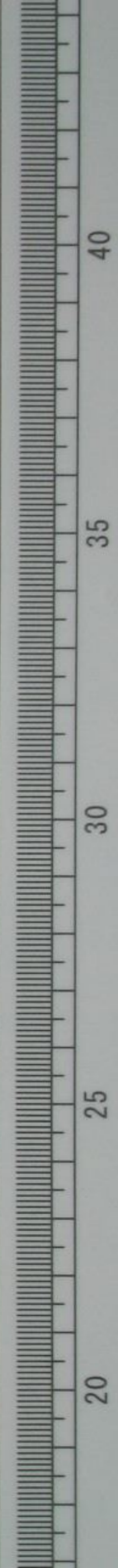


彼得大帝偉績上編

日野嚴夫譯
 千葉文爾
 大槻修二閱
 上卷

又 2
 4648
 1



22
4648

門又 2
號 4648
卷 1

又 10
3.239
1-2

日野 嚴夫 同譯
千葉 文爾
大槻 修二 閱

彼得大帝傳績

明治十一年九月
版權免許
兩友舍藏版

彼得大帝傳績
題

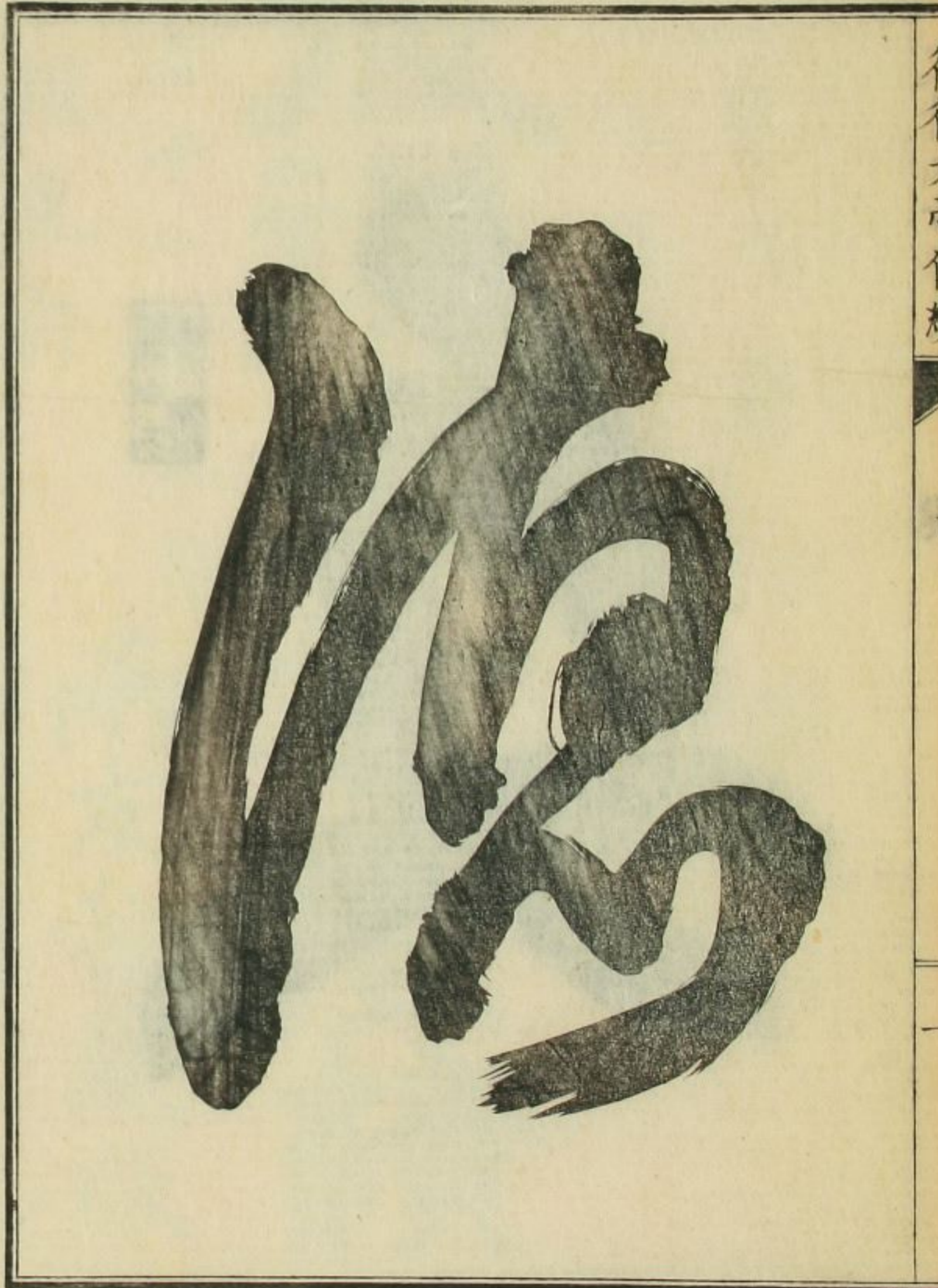


靜中
方

兩友舍藏版

金澤市
新正堂

行不方后作卷



行不方后作卷

行不方后作卷

題



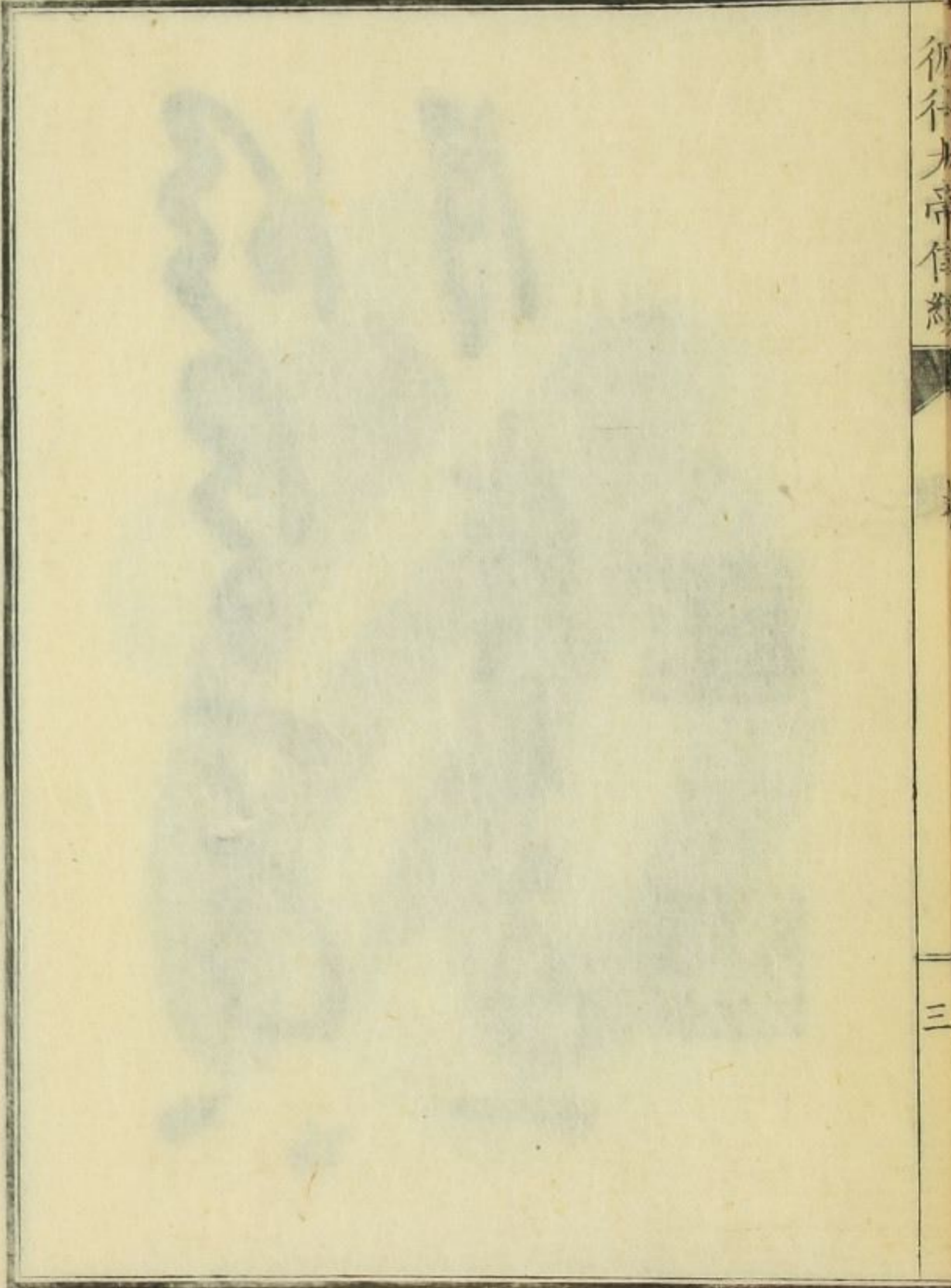
御行力帝

御行力帝

御行力帝

御行力帝

御行力帝



彼得大帝傳續序

陸麟

橫壓歐亞之脊。河。攬頭於西南。而掉尾於東北。矢矯數千里。境域之大。冠萬國者。為魯西亞。余每閱地圖。未嘗不慨然於彼得大帝之雄圖也。而譯書未有詳載其事者。以為憾焉。頃者。日野千代志二君。修魯西亞之暇。譯此書。見屬序言。余讀大喜之。今夫地球上。政體最相反。而各擅

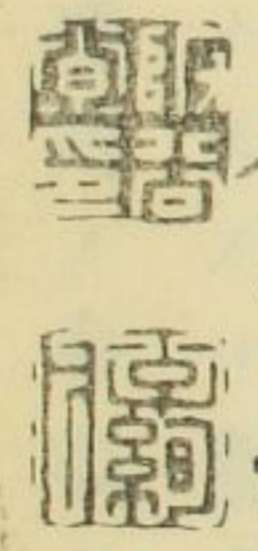
其長者為米魚。而米者華盛頓。而開魯者大夫。此二人者。俱可稱守內千古大豪傑也。抑華盛頓由開明之俗。乘衆人憤怨。以立共和政體。雖非尋常豪傑所能辦。而其勢或易也。大帝據重法。不先之地。承頑猶者。愚之積習。身又生于深宮。習于慈母。非華盛頓起。身書生之比。而卓然獨勵。振頹綱。變汙俗。至強大冠萬國。其績尤偉也。而我邦

今日之執力。最可著眼者。蓋亦在于此矣。紫大帝自幼好學敬師。觸于物。輒審問明辨。深致意於其所不及外國之原。帝厭宴饗食之浮華。居陋屋而盡力乎鄙事。所以求唯實益而已。其遊萬獨逸也。途見戴佛製髮鬘者。怪把玩之。知其為無用觀美。冷笑投路隅去。是小事也。可以推大。吁嗟。學外國而痛斥華靡如此。豈有邯鄲失故步

之憂哉。我邦以一系帝國。取長於外邦。善以帝為法。則他日為無比強國。非難也。雖然。國各有其宜。不可拘矣。豪傑有天授。不易學矣。而他日變化。復有大豪傑出焉。魯政之變。未改之。轉魯皆教之。不可測者。余豈敢謂我帝國必可悉與魯同其政體哉。然而強弱無常。唯人自取之。故豪傑之興國。其篤學力行。擯虛飾而講實理。循其勢。

而制其體。學外國而不為優孟衣冠者。則必千秋同揆。如華盛頓亦然已。是則所不可不務也。二君翻譯之意。其亦存乎此歟。余既當二君之囑。一讀之餘。又慨然錄所感云。

明治十一年八月 朗虎阪谷泰西撰



彼得大帝偉績凡例

一 原書ハ西曆一千八百七十二年露國彼得堡ニ
 於テ刊行セル其國人烏拉垵彌爾素羅金氏ノ
 著述ニシテ卷帙浩瀚ナラザルモ一世彼得帝
 鴻業ノ一斑ヲ見ルニ足レリ原名ハ則チ「ラズス
 カーズィ、スベトレ、エリ」云ト云フ之ヲ譯シテ彼得大帝
 偉績ト為スナリ

一 生等 此書ノ譯ヲ起ス所以ノモノハ素ヨリ之
 ヲ以テ本業ト為スニ非ス頃刻ノ學暇ヲ偷ミ
 一ハ以テ一世彼得帝ノ事蹟ヲ探索シ一ハ以テ

譯文研究ノ為メニスルニ在ルノミ然ニ生等
資生粗率加フルニ學力淺薄ナルヲ以テ文態
ノ雅馴ニ乏ク譯辭ノ適當ヲ欠クモノ極メテ
多シ故ニ之ヲ函中ニ秘シテ敢テ人ニ示サ
リシ然ニ一日友人來リテ生等ニ謂テ曰君等
露學ニ從事スル年已ニ久シ何為ソ露ノ原書
ヲ取り之ヲ譯シテ世ニ公ニセザルヤ請フ看
ヨ世界ノ三傑ト稱セラル、露國一世彼得帝
ノ偉業スラ詳記セシ者未ダ世ニ在ルヲ見ズ
豈遺憾ノ至リナラズヤ君等露學ニ從事シテ

何為ソ此ニ着意セザル實ニ其任ニ背ク者ト
云フモ誣言ニ非スト是ニ於テ生等竊ニ函中
秘スル所ノ彼得大帝偉績ヲ取りテ之ニ示セ
リ友人之ヲ見大ニ喜テ曰君等夙ク此ニ着目
シテ既ニ稿ヲ起セリ何ゾ早ク人ニ示サズ
テ之ヲ私箱ノ中ニ秘藏スルニ忍ベルヤ若シ
君等之ヲ刊行セズンバ余自ラ之ヲ梓ニ上
ト欲ス請フ之ヲ余ニ任セヨト因テ其草稿ヲ
付與シ遂ニ世ニ公ニセシムト云フ
一此書全編六卷トナス而テ未ダ全ク譯述スル

ニ至ラズト雖氏友人ノ需ニ應ズル急ナルヲ
 テ姑ク先ツ二卷ヲ上梓ス其後ノ四卷ハ間
 斷セズ譯成ニ隨ヒ剞劂ニ付セントス覽者幸
 ニ之ヲ諒セヨ

一地名人名ハ之ヲ填ムルニ漢字ヲ以テス然レ
 氏漢音ノ全ク露音ニ適スル能ハザルモノア
 レバ固リ穩當セザル者アラン其地名人名ヲ
 區別スルヲ左ノ如シ

人名	種類
地名	宮殿園圃ノ類此ニ屬ス

官名	爵位稱呼ノ類
萬物	譯字ヲ下ス能ハザル者ハ原語ノマ、ヲ記ス

譯者識

彼得大帝傳績

目録

上編卷之上

第一章

○彼得大帝以前ノ露國形勢ノ事

第二章

○彼得ノ誕生及ビ其眷屬ノ事

○彼得幼時ノ嗜好及ビ遊樂ノ事

○彼得教育ヲ受ル事

○彼得性質ノ事

○父ノ死後彼得生長ノ事

第三章

○黑窩德亞歷舍懷的ノ死去ノ事

○親王易黃寶坐ヲ彼得ニ讓與シ及ビ

其退位ノ事

○執政索比亞ノ事

○射手ノ事

○射手騷擾ノ事

○彼得十歳ノ時剛毅ナル事

○騷擾鎮定ノ事

上編卷之下

第四章

○彼得幼キ時普列伯拉善斯克郷ニ

於テ遊樂ノ事

○彼得始テ海軍ニ着意スル事

○彼得百列亞斯老弗ノ湖ニ舟遊スル

事

○彼得ヲ弒セントシタル陰謀ノ事

○索比亞ノ修道院ニ幽セルノ事

第五章

- 彼得政事ヲ親ラスル事
- 彼得海軍及ビ兵隊ノ規律ヲ確定
セントト思考セシ事
- 外國人ヲ露國ニ聘スル事
- 彼得ノ亞爾含客利斯克ニ赴ク事
- 白海ニ於テ颶風ニ遇ヒシ事
- 引路者安參普ノ事
- 始テ警衛兵ノ設ケアル事
- 第六章
- 青年輩ヲ擇テ外國ニ留學セシムル事

- 彼得ヲ殺害センコトヲ企ル事
- 彼得ノ外國ニ旅行スル事
- 彼得ノ客居克斯倍路克亞迷士的爾
大謨及ビ倫敦ニ滞留ノ事
- 彼得ノ本邦ニ還ル事
- 中編卷之上
- 第七章
- 射手廢散ノ事
- 新ニ露國ヲ齊整スル事
- 第八章

○學校活板局ノ設立新字ノ發明書籍ノ印刷等ヲ以テ人民ヲ開化ノ域ニ進歩セシムル事

○露西亞日報新聞開設ノ事

○彼得ノ莫斯科在中行為ノ事

○改曆ノ事

中編卷之下

第九章

○諸々ノ郡邑都府ニ於テ内政ヲ制定スル事

○瑞典ト戦争ノ事

○彼得堡創立ノ事

第十章

○瑞典ト戦争ノ續キノ事

○那爾話ヲ攻メ取ル事

○克倫蘇答的堡塔建築ノ事

○彼得ノ内國旅行ノ事

○製作業ヲ盛大ニスル事

○彼得堡ニ移民及ビ其整頓ノ事

○日蝕ノ理ヲ明辨シテ人民ノ惑ヲ解ク事

○彼得ノ再娶ノ事

下編卷之上

第十一章

○露國內ニ於テ瑞典人ト争鬪ノ事

○馬設巴ノ事

○波達烏ノ戦争及ビ其結局ノ事

○尼蘇達的ノ結和ノ事

○講和ノ慶賀及ビ彼得ニ大帝ノ尊號

ヲ與ヘテ國多ト稱スル事

第十二章

○集議院及ビ元老院ヲ設置シテ露國

ノ内部ヲ齊整スル事

○彼得堡府人ヲシテ航海術ヲ習練セ

シムル事

○職業ヲ盛大ニスル事

○農夫ヲ外國ニ遣ス事

○風俗ヲ矯正スル事

○人民ヲ開化ニ導ク事

○宮殿ニ於テ大宴會ノ事

下編卷之下

第十三章

- 彼得大帝ノ彼得堡在中行為ノ事
 - 職業場及ビ養育院ノ設立ノ事
 - 全國戶籍調べノ事
 - 彼得ノ教法ヲ崇尊スル事
 - 賄賂ヲ貪ル者ヲ譴メテ真實ノ功勞ニ着意セシムル事
 - 彼得ノ節儉ナル事
 - 彼得ノ衣服ノ事
- 第十四章

- 禮拜堂ヲ建築シテ新都ヲ修飾スル事
- 内烏斯基修道院ノ創立及ビ聖亞歷山アレキサン大内烏斯基ノ櫃ヲ其所ニ移ス事
- 彼得ノ病ノ事
- 彼得ノ拉弗達在中ノ功勞ノ事
- 彼得大帝ノ崩去及ビ其埋葬ノ事

彼得大帝偉績目錄終

彼得大帝偉績上編卷之上

第一章

彼得大帝以前ノ露國形勢ノ事

露人ハ今日居ヲ洪大ナル都府村邑ニ占メ而テ
百般ノ便利千種ノ安樂ヲ得ザルナシ然レモ人
民動モスレバ不滿ヲ此ニ訴フルアリ曰生活ニ
難シ曰生活ノ道其宜キヲ得スト或ハ曰今古ノ
風俗ヲ相比シテ之ヲ視ルニ昔時ノ民ハ善良敬

日野嚴夫 同譯
千葉文爾
大槻修二 閱

明治三十四年十月十日
本校出版部謹贈



度ニシテ常ニ能ク神ノ法ヲ遵守シ而テ狡猾詐
偽ノ習ナク皆儉樸廉讓ノ風ヲ貴重セリト其云
フ所概シテ之ヲ虚誕ト謂フ可ラズ必ズ一二ノ
允當ナル者アルベシト雖氏未ダ博ク今古ノ事
實ヲ究メザル者ノ如シ爰ニ露國二百年前ノ形
勢ト今日ノ事情トヲ比較論述シテ以テ露國史
ヲ讀ム者ノ參考ニ供セントス
二百年前我都府ノ如キ今ニ比スレバ甚ダ狹隘
ニシテ至テ蕭疎ナリ且ツ其通路ノ如キモ譬ヘ
バ甲ヨリ乙ニ至ラントスルニ其間ニ驛亭ナク

唯茫々タル原野四面ニ連亘スルアルノミ時々
騎行スルアルモ甲乙ノ間其乘馬ヲ代フル所ナ
ク殆ト一月程ヲ費サズンバ彼ニ達スル能ハザ
ルナリ而テ郵便ノ如キハ固ヨリ其設ケナシ況
ヤ鐵道等ニ於テヲヤ常ニ往來スルニ大道小路
ノ修繕ナク草木ヲ披拂シ砂石ヲ蹴踏シテ跋涉
スルノミ若シ誤ナテ一タビ路ヲ曠野ニ失ヘバ
則チ其舊路ニ復ル甚ダ難シ運輸ノ馬車ニ至テ
ハ固ヨリ其破毀ヲ免ル能ハズ王公貴人ノ如キ
ハ其發程ニ先チ數多ノ人夫ヲ使役シテ道路ヲ

修繕シ騎馬ヲ供設セシムト雖氏是レ衆庶ノ能
スル所ニ非ズ加フルニ其甲乙村市ノ間ニハ鬱
々タル茂林相連且シテ以テ賊黨ノ巢窟トナリ
屢出テ行人ヲ害ス商隊ノ如キモ亦其剝奪ヲ蒙
ルアリ故ニ其殺害ヲ防クガ為メ必ズ警卒ヲ携
ヘザルヲ得ズ又其都府ハ今日ノ如キ壯大ナル
者ニ非ス四面ニ竹柵ヲ環ラシ塹壕ヲ穿テ纜
ニ兇人猛獸ヲ防禦スル所ト為セシ者ノミ其造
營タルヤ皆狹矮粗惡ニシテ竹木ヲ以テ之ヲ結
構シ石室ノ如キハ固ヨリ其建築ナシ其街衢夕

ルヤ傾斜彎曲ナル小路ニシテ更ニ平坦ナル正
路ナシ故ニ不熟ノ人此ニ路ヲ失ヘバ原路ニ返
ル難シ橋梁ノ如キハ更ニ之ヲ架設セズ是ヲ以
テ秋霖相連ルノ日ニ於テハ徒歩スル能ハズ馬
行スルモ道路ノ泥濘尺余ニ至ル故ニ四蹄滑躓
シテ進ムヲ得ズ又朝暮ニハ室内ニ坐シテ外出
セザルヲ以テ勝レリトナス何トナレバ零霧四
面ニ充塞シテ冥暗咫尺ヲ辨ズル能ハズ盜賊拐
兒等至ル所遇ハザルハナシ夏日炎天ニ當テハ
其都府ニ住スル最モ困難ナリ蓋シ種々ノ汚穢

物ヲ每家ヨリ直ニ街上ニ捨ツルノミナラズ鳥
獸ノ如キモ皆通衢ニ於テ之ヲ屠殺シ或ハ煮或
ハ炙リ以テ其食ニ供フ而テ之ヲ掃除洒滌スル
者ナキガ故ニ炎熱人ヲ射ルノ時ニ至レバ則チ
街傍ニ投棄スル者腐敗シテ空氣ヲ染汚シ其臭
氣ノ甚キヲ實ニ想像スルニ堪ヘタリ是ニ由テ
種々ノ病因發生スルモ之ヲ療治スルノ方法ヲ
知ル者ナシ王公ノ醫員ヲ獨逸ヨリ聘スルアリ
ト雖氏人民ハ之ヲ目シテ妖術者トナシ之ニ依
頼スルヲ欲セズ疾病ハ愈劇甚ニ至ルト雖氏彼

等其治療ヲ受ケザルノ致ス所ニシテ其罪已レ
ニアルヲ知ラス妄リニ狼狽シテ或ハ呪師ニ倚
リ或ハ術者ニ頼リ以テ平裔ヲ得ントス或ハ其
苦痛ニ堪ヘザル片ハ酒ヲ飲ムヲ甚レ故ニ病ハ
愈増加シ一時死スル者其幾千ナルヲ知ラズ而
テ其屍體ヲ埋葬スル者ナク皆街頭ニ委積シ臭
氣天地ニ充滿ス故ニ全市ノ人モ亦殆ト盡ント
スルニ至ル嗟々此慘怛ノ時ニ當リ更ニ災害起
テ一層ノ困苦ヲ極メシトアリ是レ即チ莫斯科
ノ火災ナリ當時宮室ノ榮築ハ既ニ前ニ説クガ

如ク皆水造ニシテ序次ナク縦横互ニ屋ヲ並ブ
 故ニ一家火ヲ失スレバ直ニ進テ四方ニ延焼ス
 而テ其消防ノ術モ亦甚ダ迂拙ナリ今日ノ如キ
 唧筒等ノ機具ノ備ナク唯木桶ヲ携ヘテ東ニ馳
 セ西ニ奔リ衆ヲ率井テ狼狽スルアルノミ就中
 殊ニ憐ム可キ者アリ烟焰四起ノ中ニ坐シ十字
 形ヲ額上ニ畫シ依然トシテ逃避セズ自ラ以為
 ク是レ神ノ許ス所ナリ如何シテ之ヲ救ハンヤ
 ト試ニ思ヘ一家ヨリ失火シテ隣家ニ遷リ隣家
 ヨリ又其次ニ蔓リテ忽チ一面ノ火林ヲ現ス若

シ此時北風ノ猛烈ナルアレバ全府ノ灰燼ニ歸
 スルモ知ル可ラズ都邑ノ焼痕數十里外ニ連亘
 シ數里ニ瀰漫セシ茂林モ亦之ガ為メニ焚燒セ
 リ人民ハ悉皆家財什器ヲ投棄シテ狂奔狼走ス
 ルノミ是ニ於テカ流離窮乏ノ者或ハ凍餒狂癡
 ノ者或ハ廢疾不具ノ者陸續各所ニ群集シ各々
 寒餓ニ迫リ全國ニ流離シ號哭ノ聲地ヲ撼シテ
 救ヲ入ニ求メタリ
 夫レ平安ノ時都人ノ生活スラ猶ホ見ルニ堪ヘ
 サルガ如シ況ヤ村邑ノ民ニ於テヲヤ就中富有

彼得大帝傳 卷之五

ノ民ハ窮乏ノ徒ニ比スレバ百事幸福ナルハ論
 フ俟タズト雖凡然レ凡亦大ニ然ラザル者アリ
 縱令貨財ヲ畜有スルト雖凡自在ニ事ヲ為ス
 能ハズ智識ヲ開發スルニ術ナク見聞ヲ廣博ニ
 スルニ計ナシ是レ其困難ノ大ナル者ナリ當時
 教育ノ道猶ホ未ダ立タズ偶縉紳ノ中ニ少ク讀
 書ヲ善クスル者アリト雖凡自餘ハ皆蒙昧ノ徒
 ニシテ徒ニ時日ヲ消費シ更ニ事物ノ理ヲ考究
 スルヲ知ラズ故ニ耳目ニ感觸スル奇事珍物ア
 リト雖凡敢テ意ヲ此ニ注グナシ眼前ノ物ト

雖凡何ノ理由ニ因テ然ルヲ得ルカ又他邦人民
 ノ事業風俗ハ果シテ何如ナルヤヲ思ハズ假令
 疑ヲ發スルアリト雖凡能ク之ヲ辨解明説スル
 者ナシ況マ今日ノ如キ昭々タル解釋ニ於テヲ
 ヤ通商交易上ノ事ニ至テハ最モ鍊達セズ大ニ
 困難ヲ極メタリ其物産ノ如キハ則チ松脂木皮
 蜂蜜等ニ過ギズ而テ又之ヲ鬻ク所ナシ蓋シ地
 ハ萬物ヲ生ジ人之ヲ以テ種々ノ物品ヲ造製ス
 ルヲ得ベシト雖凡然レ凡其運用術ナキヲ如
 何セン山林ヲ伐リ或ハ五穀ヲ蒔キ以テ無量ノ

收穫ヲ得ル等ノ如キ能ク之ヲ為ス有リト雖モ
 唯累々トシテ之ヲ目前ニ山積シテ他ニ運漕ス
 ルコトヲ得ズ
 中ニハ偶瑣々タル自己ノ小事ヲ為ス者アリト
 雖モ事終レバ徒ニ時日ヲ飲食ニ費シ或ハ拳搏
 闘獸等ニ耽リ或ハ寂然トシテ樂マサルアレバ
 則チ其同室ノ輩ト相撃テ以テ其憂鬱ヲ散ズル
 等ニ過ギザルナリ抑モ當時ト雖モ督憲書記官
 書記生ノ如キ者アリ各々掌トル所ノ公務無キ
 ニ非ザレバ此輩皆今日ノ如キ勤務ヲ為セシ者

ニ非ズ其督憲ナル者ハ徒ニ高位ニ坐シテ其俸
 祿ヲ貪リ汲々トシテ民ヨリ賄賂ヲ獲シテノミ
 ヲ之レ計レリ書記官ハ公平ニ裁判シテ罪アル
 者ニ相當ノ罰ヲ加フルハ其分ナルニ唯私利ヲ
 恣ニシ其曲直如何ヲ論ズルナク雙方ヨリ私ニ
 金貨ヲ取テ直ニ之ヲ放赦シ若シ大事ニ關涉ス
 ルアレバ之ヲ數年ニ遷延セリ百般緊要ノ事業
 ニ於テハ總テ官吏ノ指令ニ由テ決定スルノミ
 其兵制ニ於ケル素ヨリ取ル所ナシ莫斯科ニ射
 手隊ノアルノミニシテ外ニ常備兵ノ設ケナシ

一且事アルニ臨ンデハ民兵ヲ徵募シ之ヲ練習
スルコトナク直ニ驅テ戰場ニ臨マシム其兵裝ノ
如キハ素ヨリ粗惡ヲ免レズ爰ニ彼得大帝ノ世
ニ當リ農夫波瑣蘇格弗ナル者アリ屢書ヲ著シ
テ露國當時ノ制度ヲ論ゼリ其ノ軍隊ノ景況ヲ
記セシ言ニ曰ク歩卒携フル所ノ銃器ハ甚ダ粗
惡ニシテ兵士其ノ機關ヲ用井ルヲ知ラズ戰場
ニ臨ンデハ赤手搏鬪シ或ハ鈍鎗鋸戈ヲ以テ接
戦ス其拙弱ナルコト概ネ我三四人ヲ以テ敵ノ一
人ニ當ルニ足ラズ其騎兵ノ如キニ至テハ最モ

觀ルニ堪ヘズ蓋シ瘦馬繩轡已テニ皆其用ニ適
セズ加之戰士ハ其裝服ヲ為サズ又其兵器ヲ用
井ルヲ知ラズ進退ノ拙劣ナル言ヲ待タズシテ
知ル可ギナリ武士ノ如キハ唯射的命中スル能
ハザルノミナラズ銃丸ヲ裝スルコトモ亦之ヲ知
ラザルニ至ル偶二三ノ蒙古人ヲ擊殺スルバ大
ニ之ヲ奇トシテ以テ己ガ勲功トナシ我軍ノ死
傷數百人ニ至ルト雖モ敢テ之ヲ意トナサズ其
戰場ニ在ルヤ敵ヲ攻撃スルノ意ナク唯早ク我
家ニ歸ルヲ以テ心ト為セリ乃チ天ニ祈リテ曰

神ヤ吾ニ小傷ヲ受ケンメ而テ苦痛多カラズ以
テ能ク大王ノ恩賞ニ與ラシメヨト其戰場ニ臨
ムヤ各自其道所ヲ搜索シ甚キニ至テハ部卒ヲ
率井テ林中ニ匿レ或ハ谿間ニ潜ミ以テ衆軍ノ
還ルヲ待テ之ニ混入シ同ク戰場ヨリ陣營ニ赴
クノ體ヲ為ス皆曰神ヤ我儕ヲシテ干戈ヲ動サ
ズシテ能ク大王ニ仕ヘシメヨト此ノ如キ弱兵
ヲ以テ國家ヲ強盛ニセント欲スト雖凡豈得ベ
ケンヤ是ニ於テカ隣國ノ民ハ常ニ我露人ヲ侮
辱スル尤モ甚シ然レ凡彼等皆露國ヲ以テ其母

トナス者ハ何ダヤ蓋シ土地廣大ニシテ且ツ沃
饒ナリ人民貧窮ニシテ風俗蠻野ナリト雖凡其
性質敏捷剛毅ニシテ勇敢ノ氣慨アレバナリ是
ヲ以テ往古ヨリ彼等ノ陰カニ畏懼スル所トナ
ル若シ露國ヲシテ國富ミ兵強カラシメバ彼等
ノ危キト犬馬ノ虎狼ニ對スルガ如シ故ニ我ヲ
シテ依然トシテ其蠻俗ニ沈淪シ強盛ニ進向シ
以テ萬國ト對峙スルヲ得ザラシメンガ為メニ
更ニ我國ニ侵入シ我弱兵ヲ毀傷スルト數度ニ
及ベリ或ハ城市ヲ掠奪シ或ハ人民ニ貢租ヲ課

支那の歴史

卷之二

支那の歴史

八

シ甚シキニ至テハ彼國ノ親王ヲ以テ我國ノ王位ニ即カシメシトテ圖ルニ至レリ加之正教宗者ヲシテ盡ク彼ノ奉ズル所ノ教ニ歸セシメシトス當時蒙古土耳其波蘭瑞典及ビ日耳曼ノ人民ハ皆大ニ我露人ヲ侮謾セシト雖モ然レモ我敢テ之ニ抗スル能ハザリシハ實ニ慨嘆ノ至リナラズヤ

以上記載スル我露國古昔ノ形勢ヲ通觀シテ能ク之ヲ他國ノ景情ト參考セヨ實ニ當時ノ國勢ハ甚ダ軟弱ニシテ他國ト拮抗スル能ハズ其邦

内ヲ顧レバ則テ屢兵燹ニ罹リテ殆ト困弊ヲ極メ且ツ未タ蠻俗ヲ脱スル能ハズ然ニ我接近ノ諸國ニ於テハ既ニ百般ノ便益ヲ開キ千種ノ事業ヲ起シ其功ヲ奏スルト此ニ年アリ乃チ威ニ學校ヲ設ケ百科ノ學術ヲ興シテ兒童ヲ教育シ有用ノ人物陸續輩出セリ又其人民ハ各處ニ製造所ヲ設ケテ專ラ工職ヲ營ミ人カノ及ハザルアレバ各種ノ器械ヲ以テ之ヲ造製セリ其城市ノ築營ニ至テハ多クハ石造ニシテ我ニ比スレバ尤モ堅牢緻密ナリ其禮拜堂宮殿城樓ハ巍然

トシテ雲際ニ聳エ其高キヲ仰キテ之ヲ望メバ
頭帽為メニ背後ニ落チントス又街衢ニハ常ニ
明燈ヲ掲ケテ市中ヲ光照シ或ハ江河ニ橋梁ヲ
架シテ行路ノ便ヲ開キ或ハ公園ヲ置キ或ハ遊
歩場ヲ設ク其樹木ヲ培栽スルハ唯其觀ヲ美飾
スルノミニ非ズ空氣ヲ清淨鮮明ニスルノ要道
タルヲ以テス而テ驛遞局郵便局等ヲ設ケテ以
テ通信ノ便ニ供ス其交易ノ道ニ於テハ最モ練
達ニ欲スル所意ノ如クナラザルハナシ又各所
ニ多ク人間必需ノ藥草ヲ植エテ之ヲ製練シ城

市ハ日ニ繁榮シ道路ハ能ク修繕ヲ加ヘテ以テ
陸運ヲ通シ或ハ巨大堅牢ノ船舶ヲ海ニ泛ベテ
之ニ品物ヲ載セ各所ニ輸出シテ多少ノ利ヲ獲
又外國ニ於テ製作スル所ノ物品ヲ選ビ其價ノ
廉直ナル者ヲ買テ之ヲ輸入セリ
當時外國ノ裁判ノ如キハ未ダ全ク善美ヲ盡サ
スト雖モ我露國ニ比スレバ其勝ルヲ遠シト謂
フ可シ凡ソ訴訟スル者アレバ其事實ヲ問ハズ
直ニ原告者ヲ糾問シテ其是非ヲ裁決ス故ニ各
人常ニ以為ク設ヒ小事ト雖モ若シ之ヲ訟フル

時ハ必ズ公裁ヲ得テ其罪ハ自ラ奸惡ナル者ニ
歸スト當時他邦ト雖_レ唯_レ安寧幸福ノ事ノ之有
ルニ非ズ亦今日ノ如キ種々ノ災害及ビ騷擾等
有ルヲ免_レズ然_レモ之ヲ我ニ比スレバ生活ノ
道大ニ難易苦樂ノ差異アリ
抑モ露人ハ未ダ蠻俗ヲ脱セズト雖_レ概シテ之
ヲ頑愚ノ民ト謂_フ可ラズ蓋シ自ラ能ク此ノ如
キ善良ノ活業ヲ考察スル_{コト}ヲ得ベシト雖_レ此
便益ヲ獨逸人ニ摸倣スル_{コト}ヲ欲セズ是_レ其困
難ナル第一ノ原因ニシテ露國尤モ他國ヨリ進

歩ニ後_レタル所以ナリ蓋シ他國ノ民ハ既ニ種
々ノ器具等ヲ發明シテ之ヲ運用セシ時ニ當テ
我國ニ於テハ漸ク始テ之ヲ製作スル_{コト}ニ着意
ス其二ハ露民ハ一般獨逸人ト親交スル_{コト}ヲ欲
セズ孤立シテ更ニ他國ニ遊行セズ他國人モ亦
敢テ之ヲ眷顧セズ何トナレバ露民ノ他國人ヲ
待遇スル懇切ナラズ他國人モ亦敢テ我國ニ居
住スルヲ欲セズ露ノ國タルヤ雪嵐凝閉シ寒威
凜烈タリ其家屋タルヤ皆粗惡不潔ニシテ其ノ
飲食及ビ他ノ物品積蓄ノ如キニ至テハ尤モ彼

等ノ慣熟セザル所ナレバナリ加之我民ハ彼等
ヲ回々^{ラスリ}教人ノ輕蔑ト稱シ敢テ之ト共ニ事ヲ謀ル
コトヲ欲セザルノミナラズ若シ城市ニ於テ疫病
或ハ火災等アルニ會スレバ直ニ獨逸人ヲ疑ヒ
テ以為ク彼等魔法ヲ以テ之ヲ毀損シ亦魔毒ヲ
以テ之ヲ患害セリト狂妄激怒ニ堪ヘズシテ恣
ニ彼ヲ殘害セント欲ス然リ而テ我正教者ハ恰
モ未ダ感覺アラザル幼童ノ如ク久シク蒙昧ノ
間ニ在テ我大帝彼得第一世ノ世ニ及ブ是ヨリ
先キ諸王ノミナラズ殊ニ彼得ノ父^ア亞歷舍彌海

爾懷的王ノ代ニ當テ海外ヨリ醫員及ビ百般ノ
職工等ヲ露國ニ聘スルアリト雖^レ唯王ノ為メ
ノミニシテ人民一般ノ為メニ非ズ其之ヲ遇ス
ル殆ント希有ノ珍寶ニ異ナラザリキ

第二章

- 彼得ノ誕生及ビ其眷屬ノ事
- 彼得幼時ノ嗜好及ビ遊樂ノ事
- 彼得教育ヲ受ル事
- 彼得ノ性質ノ事
- 父ノ死後彼得生長ノ事

亞歷舍彌海爾懷的王其人ト為ルヤ篤實温厚ナ
リ王前キニ貴紳彌羅斯老弗家ノ馬理亞伊利伊
尼知那ヲ立テ、后トナシ共ニ無事ニシテ光陰
ヲ送ル一幾ント二十有餘年ナリシガ其末年ニ
至リ凶喪累至シ深ク王ヲシテ憂患セシメタリ
馬理亞后ハ不幸ニシテ王ニ先チテ歿シ未ダ三
月ヲ歷ザルニ親王西迷蓋モ亦四歳ニシテ卒シ
又半歳ヲ過ギテ親王亞歷舍甫メテ十六歳ニシ
テ亦卒ス豈人生悲嘆ス可キノ至リナラズヤ今
生存スル者ハ皇女索比亞ト二親王黑窩德及ビ

易黃ナリ然レ此ニ親王ハ皆軟弱多病ニシテ
政事ニ關ル一能ハズ唯索比亞ハ健康ニシテ且
ツ才能アリ然リト雖凡當時ノ國風ニシテ女子
國政ヲ執ル一ヲ得ズ此時ニ當リ王僅ニ四十歳
ナリ故ニ自ラ以為ク剛毅強壯ノ身猶ホ未ダ衰
ヘズト因テ再ビ娶リ以テ其重ニ任ズ可キ太子
ヲ得ント欲ス王常ニ親信ナル貴紳亞達門設爾
客懷的馬士黑弗ヲ訪ヘリ彼レ聰明銳達ニシテ
謀議ノ任ヲ負フ者ナリ一日王其家ニ在テ貴紳
吉利烏爾波爾意統懷的那爾伊素詮ノ女那達利

波爾意統懷的那爾伊素詮ノ女那達利

亞吉利羅那ニ邂逅セリ其窈窕タル仙姿王ヲシ
テ為メニ愛慕ノ情ヲ起サシム王之ト面晤シテ
其唯嬋娟ノ艷姿ヲ具スルノミナラズ穎才多能
ニシテ且ツ善良温和ナルヲ知リ窈ニ謂ラク世
間此女ノ右ニ出ル者ナシト乃チ速ニ其女ヲ立
テ、以テ后トナセリ爾後僅ニ十六月ヲ歷テ后
ハ古列謨列弗ノ殿ニ於テ一子ヲ生ム名ケテ彼
得ト曰フ實ニ一千六百七十二年五月三十日午
後一時ナリ此親王ノ骨格タルヤ甚ダ堅固強壯
ナリケレバ王ノ歡喜實ニ極リナシ是ニ於テ全

莫斯科中禮拜堂ノ鐘聲ハ鏗々トレテ人耳ヲ驚
シ祝砲ノ響ハ轟然トシテ山野ニ達シ祈禱ノ聲
ハ禮拜堂ニ滿ツ是ノ如クスルヲ三日間ナリ王
又夕之ガ為メニ大赦ヲ行ヒ一時ニ罪囚ヲ放免
シ負債者ヲシテ其償還ヲ要セザラシム而テ貴
紳亞爾達門設爾客懷的及ビ吉利烏爾波爾意克
懷的ヲ擢テ以テ侍從ト為ス王直ニ貴族中ノ婦
人ヲ選ビ利話ヲ乳母ト為シ列崙參話ト哥理
轉那トヲ以テ其傳ト為シ又數多ノ婦女ヲシテ
抱負等ノ役ニ充タシム彼得ハ初メ婦女子ノ手

彼得大帝傳 卷之十一

ニ養育セラレシガ五歳ニ至ルニ及テ始テ當時
 高名ニシテ才智博識ノ最モ卓越ナル學士尼基
 達摩設懷的瑣達弗ヲ以テ彼得ノ傳トシ以テ之
 ヲ教育セシメタリ
 惜哉彼得幼時ノ事蹟ハ詳細ニ知ルヲ得ズト
 雖其傳聞スル所ニ因テ之ヲ觀レバ彼得ハ活
 潑敏捷ナル尋常少年輩ノ比ニ非ズ其勇敢ニ
 シテ且ツ好事ナル亦凡人ノ能ク及ブ所ニ非
 ガルナリ初メ彼得ハ須臾モ母ノ膝下ヲ離レズ
 シテ之ト寢食ヲ共ニシ其外出旅行ニ於ルモ亦

母ト共ニセザルナシ一日各種ノ玩弄物ト一小
 劔ヲ彼得ニ與ヘシ者アリシガ彼得他ノ玩弄物
 ニ着目セズシテ直ニ拵躍シテ其小劔ヲ與ヘシ
 者ト口親セリ是ヨリ日夜其劔ヲ帶シテ我身ヲ
 離サズ寢食ニモ亦之ヲ脱スルヲナシ自ラ謂ラ
 ク我ハ大將ナリト父王彼得ノ類ニ軍事ノ遊戯
 ヲ嗜ムヲ見テ為メニ貴紳ノ中ヨリ彼得ト同年
 輩ナル少年數十人ヲ召集シ以テ之ト遊バシム
 是ヨリ彼得ハ間暇アレバ則チ之ト共ニ軍様ノ
 技藝ヲ演習セリ初メハ唯竹馬ニ乘リ或ハ鼓鐘

彼得大帝傳 卷之十一

ヲ敵々等ニ過ギザリシガ其年稍長成スルニ隨
 ヒ益々心思ヲ此ニ焦シ其左右ノ小年輩ヲ以テ一
 小隊ヲ編製シ日ヲ追ヒテ其數ヲ增加セリ遂ニ
 其兵ヲ分ケテ二隊トナシモ莫斯科近傍ニ在ル設
 墨諾弗及ビ普列伯拉善斯克ノ郷ニ於テ整肅ノ
 習練ヲ為シ或ハ土塞ヲ築キ以テ之ヲ襲撃スル
 等ノ事ヲ演習セリ蓋シ彼得ハ之ヲ以テ遊戯ト
 ナスノミナラズ即チ眞實ノ軍事ニ關スル所ノ
 者ニ於テハ盡ク之ヲ學バザルハナシ常ニ我身
 ノ尊キヲ顧ミズ或ハ自ラ窖穴ヲ穿堀シ沙石ヲ

負擔シテ以テ塞ヲ築キ或ハ自ラ警卒ト為リ時
 ニ戲言ヲ以テ衆人ヲ獎勵シ或ハ以テ兵卒トナ
 シ或ハ以テ鼓手トナシテ各其任ヲ與ヘタリ
 此幼少ナル親王ノ遊戯ハ後來露西亞ノ為メニ
 何等ノ影響ヲ來タセシヤハ後卷ニ於テ應ニ之
 ヲ觀ルベシ故ニ今暫ク之ヲ措テ論ゼズ先ヅ彼
 得ノ他ノ事業ヲ舉ゲテ以テ之ヲ述ベントス抑
 モ彼得ノ師瓊達弗ナル者ハ實ニ能ク其任ニ堪
 ヘタル者ト云フベシ蓋シ彼ハ當時ニ在テ唯博
 識ナルノミナラズ又能クカメテ弟子ノ才氣ヲ

誘發ス彼得ノ活潑ニシテ且ツ好事ナルヲ察シ
 常ニ世間ノ美事ヲ見聞スルヲアレバ輒チ畫ク
 之ヲ告ゲ或ハ之ヲ殿中ニ伴ヒ種々ノ畫圖ヲ掛
 ケタル室中ニ導キ此事ト雖ヒ補益トナルベキ
 事アレバ彼得ヲ其前ニ立タシメ專ラ了解シ易
 キヲ旨トシテ詳細ニ之ヲ説明シ而後之ヲ復習
 セシメタリ或ハ諸所ノ山川海陸等ノ地圖ヲ視
 セ或ハ外國ノ城塞及ビ船舶等ノ模型ヲ示シ且
 ツ自ラ指示シテ著名ナル露國諸王ノ像及ビ其
 炳然タル勲功ノ圖ヲ畫ガシメタリ故ニ彼得ハ

我露國ノ歴史ニ於テ瞭然目撃スルガ如キヲ得
 タリ以上記載スル所ノ者ハ唯其平常ノ嬉戲談
 話ノ如クナレド彼得ノ為メニ後來博識ノ基ト
 ナリ獨リ其智識ヲ開發セシノミナラズ此ニ因
 テ大ニ意ヲ學問ニ注クニ至レリ且ツ彼得ハ常
 ニ我師ニ向ヒ種々ノ問題ヲ出シテ之ヲ質問セ
 リ而テ其智識見聞ヲ開擴スルノ念懇切極リナ
 レ瑣達弗ノ曾テ知ラザル所ト其説明シ能ハザ
 リレ事ハ後日ニ至テ外國教官列荷路士及ビ典
 墨爾瀾ナル者皆之ヲ辨說教授セリ蓋シ此教官

ハ彼得ノ既ニ生長セシ時ニ及ビテ之ニ附セラレシ者ナリ

彼得ノ學問研究ノ為メニ其長兄黑窩德屢之ニカヲ添ヘ之ヲシテ其業ヲ勉勵セシメタリ蓋シ其長兄ハ後日露國ノ如キ大國ノ王タルベキ彼得ノ為メニハ必ズ教育ノ道ヲ立テ、之ヲ能ク教養スル事尤モ肝要ナリト自ラ能ク之ヲ悟了セシ者ナリ

亞歷舍彌海爾懷的王ハ其季子彼得ノ英才ナルヲ悦ビ其後來ヲ希望シテ喜歡ニ堪ヘザリシガ

不幸ニシテ其歡樂ヲ久フスルヲ得ザリキ彼得未ダ四歳ニ滿タザルニ王乍チ病ニ罹リ一千六百七十六年一月遂ニ歿ス此時彼得猶ホ幼ナリ故ニ止ヲ得ズ微弱多病ナル其長子黑窩德亞歷舍懷的ヲ立テ、其嗣トナセリ是ニ於テカ后那達利亞及ビ其親族ノ身ニ於テ種々ノ難事現出セリ蓋シ后ハ前王ノ鍾愛スル所トナリテ其矜恤ヲ蒙ムルト最モ大ナリトス然ニ露國ノ貴紳輩ハ彼ノ素ト著名ナラザル那爾伊素金族ノ俄ニ勢力ヲ得シヲ嫉ミ又若シ彼得位ニ昇ラバ

必ズ那爾伊素金族ハ其最近ノ王族ナルヲ以テ
 大ニ權柄ヲ縱ニシ全國ヲ轉覆センモ計リ難シ
 ト大ニ之ヲ忌懼シテ暗ニ其隙ヲ窺ヘドモ前王
 在世ノ中ハ敢テ此志ヲ逞スルヲ得ザルノミナ
 ラズ曾テ其舉動モ為サバリシガ王ノ殂スルニ
 及ビ其黨與ハ黑窩德ヲ誘キ百方計ヲ廻ラシテ
 以テ馬土黑弗及ビ那爾伊素金ヲ相間離セシム
 ルノミナラズ又后那達利亞ノ間ニモ隙ヲ生ゼ
 シメタリ就中王ノ嬖人貴紳耶瑞格弗ハ王ノ寵
 遇ヲ恣ニシカメテ王ト后トヲ隔絶セシメン

ヲ謀リ常ニ王ノ繼母那達利亞ニ種々ノ怪説ヲ
 勸メ或ハ其不快ノ事ヲ為シ遂ニ言ヲ宮殿ノ狹
 小ニ托シテ后ヲ王宮ヨリ數十里外ニ在ル別殿
 ニ轉居セシメン^ト上疏セリ然レ^レ后之ヲ聽
 サズ耶瑞格弗ハ痛ク后ヲ詰責スルニ王旨ニ遵
 ハザルヲ以テ^ス后是ニ於テ潜然トシテ涕泣ス
 盖シ其凌辱ヲ臣下ニ受ルヲ以テナリ此時親王
 彼得甫メテ五歳ナリシニ其慈母ヲ愛慕スル^ト
 猶ホ燕子ノ其母ニ於ケルガ如シ故ニ今慈母ノ
 悲嘆スルヲ見テ自ラ其師ヲ伴ヒ兄王ノ室ニ抵

リ而テ再三其手ニ口親シ而テ左ノ名言ヲ陳述
セリ其言ニ曰大王ヤ吾耶ヤ瑞格弗ヲ汝ニ訴ヘン
トス彼カメテ吾ト母トヲ吾父ノ殿ヨリ逐ヒテ
遠ク別殿ニ放チ以テ汝ト親愛ヲ疎絶セシメン
トヲ謀ル古昔哥德諾弗ハ親王堙彌的テ李ヲ遠ザ
ケテ遂ニ之ヲ殺害ス今其轍ヲ踏ミ我儕ヲシテ
亦是ノ如クナラシメントス是レ第二ノ哥德諾
弗ニ非ズシテ何ゾヤ若シ吾ヲ遣ルノ殿王ノ意
ニ適スルナラバ王モ亦往テ吾ト同居セントヲ
望ム願クハ吾生命ヲ救ヒ給ヘ吾王ノ殿ヲ離レ

彼傳九帝信經
卷之

テ別殿ニ行ヲ欲セズト乃チ目ニ淚ヲ含ミ其傍
ニ從侍スル者ニ向ヒ言テ曰吾ハ大王ア亞歷舍彌
海爾懷的ハノ子ニ非ズヤ然ニ何ヲ以テ吾父王ノ
殿隅ニスラ猶ホ居ル能ハザルヤト此言ハ五歲
ノ童兒ガ心中ヨリ陳述セシ者ナルヤ或ハ瓊達
弗ノ之ニ教訓セシヤ未ダ知ルベカラズ又其母
ヲ愛スルノ篤キニ出ルト雖モ非常ノ才智ト剛
毅ナル性質ノアルニ非ズンバ何ゾ能ク斯ノ如
クナランヤ兄王ハ之ヲ聞キ大ニ驚愕シ其小弟
ト口親シ之ヲ慰撫シテ曰汝安ズヘシ母后ノ事

彼傳九帝信經
卷之

彼得大帝傳 卷之二十一
二一
ヲモ亦敢テ憂慮スル勿レ我豈ニ彼ヲシテ其意
ヲ逞フスルヲ得セシメンヤト乃チ直ニ繼母ノ
室ニ至リ痛ク其ヤ耶瑞格弗ノ為メニ欺岡セラレ
シトヲ謝シ直ニ之ヲ縛シテ后ニ與ヘ以テ其意
ニ任セテ之ヲ處刑セントヲ乞フ然レモ温良ナ
ル那達利亞吉利羅那ハ敢テ之ヲ殺スヲ欲セズ
又其罪ヲ問ハズシテ之ヲ放免セリ王因テ自ラ
之ヲ殿中ヨリ追斥ス然ルト雖モ彼ノ黨與ハ此
謀ヲ失スルノ後猶ホナ爾伊素捨ノ族ヲシテ安
堵スルヲ得セシメズ且ツ王族ノ間ニ不和ヲ構

シ彼得ノ母子及ビ其親信ヲ遠ケントヲ計レリ
貴紳マ馬土黑弗ハ彼等ノ密訴ニ因テ冤罪ヲ蒙リ
謫所ニ在ルト年既ニ久シ又后ノ父母及ビ其諸
兄弟ハモ莫斯糾ニ在留スト雖モ其身ヲ終ルマデ
遂ニ王ノ寵愛ヲ受ズシテ死セリ嗚呼惜哉才能
アル書記官ト瑣達弗モ亦敵ノ姦計ニ陥リ遂ニ彼
得ノ傍ヨリ斥逐セラレタリ瑣達弗ハ平生其幼
稚ナル彼得ヲ愛シ常ニ善事ヲ勸メシノミナル
ニ此禍ニ罹ルハ彼等ノ姦計至レリト謂フベシ
蓋シ古爾印ノ反シ王及ビ斯烏且ト稱王ト條約ヲ結ブ

彼得大帝傳 卷之二十一

ニ托シテ瑣達弗ヲ古爾印ニ遣シタリ此時后ハ
 古列謨列弗ノ殿ニ在リ鬱々トシテ樂マズ蓋シ
 此殿中ニ於テ常ニ訛傳浮説ノ類絶ユルナク争
 論誹謗ノ止ム時ナシ王モ亦姦黨ノ計中ニ落チ
 其繼母ヲ遇スル漸ク魚漏ニ出テ之ヲ待スル至
 テ輕薄ナリ且ツ屢之ヲ睥睨シ甚シキニ至テハ
 之ト相見ルヲ欲セザルニ至レリ故ニ那達利亞
 吉利羅那一ハ其子ノ危キヲ免レ一ハ我身ノ安
 全ナルヲ欲シテ多クハ普列伯拉善斯克ノ郷ニ
 居住セリ爰ニ彼得ハ溫柔ナル母ノ養育ニ依リ

益生長シ遂ニ一丈夫トナリ其容色腕力モ亦人
 ニ勝レリ其十歳ニ及ビシ比口他ニ較スレバ殆
 ント十五歳ノ少年ニ等キニ至レリ其面上ハ桃
 花ノ色ヲ含ミ宛モ美婦人ノ如ク其眼ハ黒クシ
 テ大ナリ其眼光ノ照射スルハ火ノ如ク其銜色
 ナル縮髮ヲ以テ其額上ヲ修飾シ而テ其動作ノ
 間ニモ活潑勇壯ノ精神自ラ發出現露セリ

第三章

○黑窩德亞歷舍懷的ノ死去ノ事
 ○親王易黃ノ寶座ヲ彼得ニ讓與シ及ビ其

彼得大帝傳
卷之十一

退位ノ事

○執政索比亞ノ事

○射手ノ事

○射手騷擾ノ事

○彼得十歳ノ時剛毅ナル事

○騷擾鎮定ノ事

黒窩德亞歷舍懷的ハ其皇后ニ子ナキニ因リ一
子生ルト雖凡夭死セリ更ニ其嬖人耶瑞格弗ノ
親戚馬太ノ女馬大亞普拉克西那ヲ立テ、再ビ
皇后トナセシガ爾後未ダ三月ヲ経ザルニ忽チ

莫斯科ノ人民ハ常ニ柔弱多病ナリシ王ノ登遐
ノ報ヲ得テ其府中各寺ノ鐘聲ハ實ニ悲然トシ
テ衆人ノ耳底ニ觸レタリ或ハ傳フ王終ニ臨テ
位ヲ少弟彼得ニ讓レリト然レ凡世人皆以為ク
王ハ位ヲ仲弟湯黃ニ讓レリト之ヲ要スルニ當
時王ノ手記セシ確然タル遺書ナキハ誠ニ疑ヲ
容レザル所ナリ故ニ王ノ殂スルヤ貴紳教士文
武百官皆殿中ニ來會シ王ノ尊骸ヲ拜シ且ツ王
位ヲ嗣ガシム可キ者ヲ議定センガ為メニ殿前
ニ集會セリ此時高德ノ大教師ハ數多ノ教導輩

彼得大帝傳
卷之十一

ヲ率井テ衆人ノ前ニ來リ謂テ曰皆同心同意シ
 テ以テ新王ヲ選ベヨト此ニ於テカ會合スル者
 數千人異口同音ニ揚聲シテ曰彼得ヤ彼得ヤ我
 儕汝ノ王タランヲ欲スト其呼聲嗷々然トシテ
 大地モ亦之ガ為メニ震動ス蓋シ莫斯科中ニ彼
 得ノ才智英敏ナルノ聞アル既ニ久シ故ニ衆庶
 望ヲ彼得ニ屬セリ而テ皆易黃ノ多病悞弱ニシ
 テ思慮裁斷ニ乏キヲ知リ敢テ之ニ望ヲ屬スル
 者ナカリシガ僅ニ數人ノ者アリテ呼テ曰易黃
 ヤ我儕汝ノ王タランヲ欲スト然レモ其呼聲ハ

數千人ノ音響ノ囂々然タルヲ以テ敢テ衆ノ耳
 底ニ達セザリキ傳フル所ニ因レバ皇嗣選舉ノ
 議起リシ時ニ當テ易黃自ラ陳言シテ曰露國ノ
 皇祚ヲ嗣テ王トナリ萬機ヲ親裁スル者ハ我弟
 親王彼得亞歷舍懷的ニ若クハナシ何トナレバ
 彼ノ母公大ニ彼ヲ愛ス吾レモ亦彼ニ位ヲ讓ラ
 ント欲スト云ヘリ
 此ニ於テ彼得亞歷舍懷的ハ甫メテ十歳ニシテ
 公選ニ係リ露國ノ王位ニ即キタリ然レモ猶ホ
 幼ニシテ未ダ朝政ヲ親ラスル能ハズ故ニ衆議

シテ其母公ヲ以テ攝政ト為ス是ヲ以テ群臣皆
 直ニ彼得ト君臣ノ盟約ヲ為セリ
 當時ノ形勢ヲ察スルニ外ハ至テ靜寧安穩ナル
 ガ如シト雖モ其實大ニ否ザル者アリ蓋シ親王
 ノ女兒索比亞ハ齒既ニ二十五歳ナリ自ラ以為
 ラク今後全國ノ政權ハ吾忌嫌スル繼母那達利
亞及ビ那爾伊素金族ノ掌中ニ歸セント必セリ
 ト因テ大ニ意ヲ勞シ慮ヲ焦シ其蘭閨ノ内ニ在
 テ窺ニ政權ノ彼等ニ歸セザラントヲ謀レリ露
 國古法ニ於テ諸皇女ハ總テ諸禮式ニ關與シ且

ツ民間ニ顯現スルハ深ク禁ズル所ナリ然ニ索
比亞ハ黑窩德埋葬ノ日ニ當リ禁ヲ犯シテ其葬
 祭ニ會シ而テ其柩後ニ來リ欵欵止マズ且ツ力
 メテ種々ノ異態ヲ為シ以テ弟ノ死スルニ因リ
 快々自ラ樂マザルノ情ヲ表セントス拜禮ノ時
 那達利亞及ビ彼得ハ亡王ニ訣別ヲ告ゲ其禮ヲ
 終ヘ堂ヨリ出テ、殿ニ歸レリ是時ニ當リ皇女
索比亞ハ痛ク哀慟シ姑ク弟ノ柩傍ニ立テ晚餐
 ノ祈禱ヲ終ヘテ且ニ歸ラントスルニ臨ミ衆ニ
 向ヒ高聲呼テ曰請フ我弟王黑窩德ノ倉卒ニ現

世ヲ去テ鬼籍ニ投入スルヲ觀ヨ此レ全ク惡虐ナル奸賊黨ノ鳩殺スル所ニ係ル嗚呼悲痛ニ勝フ可シヤ吾今獨リ孤トナリテ此ニ生存スル而已請フ之ヲ懲察セヨ蓋シ吾ニ父母モナク兄弟モナシ獨リ弟易黃在リト雖レ王位ニ即クヲ得ズ若シ吾レ汝衆庶ニ對シ過失アラバ早ク吾ヲ他邦ニ放テヨ但シ耶蘇信者ノ諸王ノ許ニ於テセヨト此時ニ當リ此皇女ノ詭計ニ陥リ堅ク其言ヲ信ズル者アリ大ニ其情ヲ懲察シテ深ク其言ヲ記臆セリ時ニ訛言巷說世ニ紛々トシテ人

心頗ル洵々タリ索比亞腹心ノ者及ビ那爾伊素金氏ノ仇敵等ハ耶蘇信者ヲシテ蜂起セシメンガ為メニ訛言ヲ放テ曰黒窩德王ノ登遐セシハ全ク醜殺ニ係ル其終リニ臨ミ王位ヲ弟易黃ニ讓與シ易黃モ亦敢テ自ラ其位ヲ退クヲ欲セザリシガ那爾伊素金氏ハ其屬ト共ニ國家ヲ掌握セシトヲ欲シ為メニ易黃ヲ強迫シテ位ヲ彼得ニ讓ラシメタリト是ノ如ク百方計ヲ運シテ衆ヲ煽動スト雖レ全都ノ人民敢テ之ニ應ズル者ナシ唯自ラ彼得ヲ選舉シテ王位ニ即カシメ

タルヲ以テ心ニ満足シテ敢テ沸起スル者ナシ
 然レモ常ニ騷亂ニ與シ易キ輕剽ナル射手隊ノ
 ミ其煽動ニ應シテ遂ニ騷擾ヲ起セリ射手隊ハ
 如何シテ此ノ如ク輕燥ナル乎又其射手隊ハ元
 ト何等ノ人種ナル乎今之ヲ參考スルニ易黃話
 西利懷的格羅斯努在位一千五百三十四年ニ至ル
 ノ時ニ至ル迄ハ露國ニ常備兵ノ設ケナク其之
 ヲ要スル時ニ當テヤ豪家多クノ土地人民ヲ自
 ラ兵装シテ農夫ト從僕トヲ率井郊外ニ出テ、
 習練シ都人モ亦之ニ集合ス而テ愈々大軍ヲ要ス

ル時ハ修道院ノ道士輩ニ至ルマデ其兵役ニ就
 ケリ此ノ如クニシテ民兵始メテ成立セリト雖
 モ國家防禦ノ術ニ至テハ尤モ其不便ヲ極メタ
 リト云フ可シ蓋シ民兵ヲ召募スルヤ多少ノ時
 日ヲ費スノミナラズ其新兵ノ如キハ更ニ軍事
 ニ慣レズ敵人ヲ見レバ忽チ蜘蛛子ヲ散ズルガ如
 ク四方ニ敗走ス其羸弱ナルヲ既ニ前篇ニ説ク
 所ヲ以テ之ヲ証スルニ足ル
 爰ニ易黃格羅斯努初テ常備兵ヲ置クニ當リ自
 由ナル輕剽強壯ノ者ヲ集メテ以テ射手隊ヲ編

制スルヲ命ゼリ其兵卒ハ年限ナク生涯身ヲ
軍務ニ投ズルヲ要セリ其屯營ハ官ヨリ之ヲ構
造シ常ニ給與金ヲ賜ヒ其他器具衣服等ニ至ル
マデ盡ク皆官ノ給スル所ナリ衣服ハ一樣ナレ
凡各隊ニ因テ其服色ノ異ナルノミ其服装ハ膝
下ニ垂ル、長キ羅紗ノ外套ヲ装ヒ其色或ハ紅
或ハ青或ハ石青或ハ草白或ハ深紅ナリ而テ華
麗ナル包鈕或ハ金鈕ヲ以テ其外套ニ付ス其靴
ハ天藍色ナレ凡多クハ褐色ナリ其冠帽ニ於テ
ハ羅紗或ハ天鵞絨ヲ以テ之ヲ製作シ毛皮ヲ以

テ其縁縫トス而テ其射手隊ノ住居ハ家族ヲ率
井テ殊ニ射手部落ヲ成セリ父ノ官爵子孫之ヲ
世襲スルヲ得タリ官ヨリ月ニ俸金ヲ給シ種
々ノ夫役ヲ免シ賦稅ヲ課スルヲナシ是ヲ以テ
自在ニ交易ヲ行ヒ且ツ各種ノ職業ヲ經營スル
ヲ得タリ平時ニハ常ニ王公貴人ヲ護衛シ要害
ノ地及ビ邊境ヲ戍シ而テ火災ノ消防ニモ亦相
關與ス亂起レバ則チ民兵ヲ率井車馬ニ駕シテ
戰場ニ莅ミ其需要ノ器具ハ一般官費ヲ以テ之
ヲ給スト雖モ爾餘ノ雜品ニ至テハ自ラ之ヲ備

フルヲ要セリ
 斯ノ如ク射手隊ハ衣食住ニ論ナク悉ク皆官ノ
 給スル處トナリテ萬事便宜ヲ得ザルナレ且ツ
 其勞動スル所ノ者ハ唯生活上ノ利得ノ為メニ
 種々ノ交易ヲ營ムノミニシテ敢テ他ニ驅役セ
 ラル、トナレ故ニ遂ニ懶惰ニ陥リ博奕酒食ニ
 耽溺シ貴重ノ光陰ヲ徒ニ消費スルニ至レリ此
 ノ如キ輕佻情弱ノ輩ニ善良ノ事ヲ望ム能ハザ
 ルハ固ヨリ論ヲ俟ズレテ知ル可キナリ當時莫
 斯科ノ人民ハ至テ穩静ナリト雖モ射手ノ為メ

ニ屢其亂暴ニ係リ枕ヲ高ウシテ安眠スルヲ
 得ズ加之亞歷舍彌海爾懷的ノ末世ヨリ殊ニ黑
 窩德亞歷舍懷的ノ世ニ至テ射手隊ノ風俗愈々
 亂セリ蓋シ其隊長等ハ紀綱ノ頽弛國家ノ紛擾
 ニ乘ジテ頻リニ私利ヲ射ント欲シテ大ニ其配
 下ノ者ヲ抑制シ之ニ俸金ヲ給與セズシテ唯之
 ヲ己レノ勞役ニ使用セリ是ヲ以テ其配下ノ者
 ハ常ニ經營スル所ノ貴重ノ職業ヲ廢棄スルニ
 至レリ故ニ射兵ノ中ニハ常ニ不滿ヲ抱キ頻リ
 ニ騷擾ヲ起サント欲シテ其好機會ノ至ルヲ俟

ツ者甚タ多シ

那爾伊素金氏及ビ后那達利亞ノ腹心ノ者ト相
 背馳スル黨類ハ若シ一旦事ヲ起スノ日射手隊
 ノ舉動ハ何等ノ應援勢力ヲ為ス可キヤヲ豫メ
 察知シテ索比亞黨ノ主謀何黃斯基侯ト貴紳彌
 羅斯老弗斯基ハ竊ニ人ヲ莫斯科ノ四隅ニ散遣
 シ射兵ノ部落中ニ宣言セシメテ曰親王易黃ヲ
 弑害セシ奸惡ナル馬王黑弗ヲ誦斥ヨリ名還シ
 先王ノ近臣耶瑞格弗ヲ疎斥セシ等皆奸臣ノ所
 為ナリ彼等今專ラ全國ヲ掌握シ后ノ少弟那爾

伊素金ハ己ニ自ラ王冠ヲ載カン_トヲ謀ルト此
 流言ヤ斯華禮弗斯基兵隊ヲ除クノ外ハ悉ク彼
 射手隊ヲ煽動セシムルニ足レリ既ニシテ五月
 十五日黎明合圖ノ號鐘ニ應シ諸部落ノ射兵ハ
 各々手ニ兵器ヲ提ヘ古爾印ニ來會シ門戸ヲ破
 テ亂入シ朱階ノ下ニ集リ呼テ曰速ニ親王ヲ弑
 害セシ叛虜無道ナル那爾伊素金ヲ出セヨト之
 ヲ促ス_ト甚ダ急ナリ后大ニ驚駭シ大教師及ビ
 耆老ノ貴紳馬士黑弗ト共ニ二親王ヲ携ヘ來テ
 之ヲ暴徒ノ前ニ立テ以テ其恙ナキヲ示セリ是

ニ於テ射手黨ハ始テ夢ノ醒タルガ如ク皆其欺
計ニ陥リシヲ覺リ忽チ散去セントス然ニ其巨
魁等ハ傍ヨリ大ニ叫テ曰縦令惡黨等未ダ幸ニ
弒ヲ諸親王ニ加ヘズト雖モ後日之ヲ弒セン
必セリ唯速ニ那爾伊素金等ノ奸臣ヲ與ヨト是
ニ於テ夥多ノ群卒又悉ク之ニ雷同シテ愈々宮殿
ノ墻壁ニ接迫セリ時ニ其射兵ノ長彌海爾由利
耶懷的度烏哥爾基侯ハ顧ミテ一揆黨ノ兇暴ヲ
叱責シ之ヲ制止セントセシガ忽チ捉縛セラレ
テ遂ニ殘害ヲ蒙レリ者老ノ貴紳馮士黑弗モ亦

御徳知帝尊

出テ、百方衆ヲ説諭スト雖モ其音聲ハ數百ノ
鼓聲ト嗷々タル関聲ノ為メニ衆ノ耳底ニ達セ
ズ射兵愈々激怒シテ遂ニ馮士黑弗ヲ捕縛シテ古
爾印城ノ墻壁ヨリ之ヲ投下セリ然ニ其壁下ニ
ハ數百ノ劔鎗蟻ノ如ク叢集セリ故ニ不幸ナル
カナ毫モ罪ナキ馮士黑弗ハ滿身創傷ヲ被リ斃
テ而テ歿ス其慘酷ナル實ニ歎スルニ勝ヘタリ
皇后ハ大ニ恐レ親王及ビ大教師ヲ從ヘ共ニ深
宮ニ入り肯テ外ニ出テズ暴徒ハ愈々激動暴起シ
テ其勢恰モ猛虎ノ如ク行ク所トシテ王族ヲ滅

彼得大帝傳

サントヲ謀リシ叛虐者ト私認セシ者ヲ搜索シ
古爾印ノ西ヨリ東ニ南ヨリ北ニ悉ク横行セザ
ルハナシ或ハ禮拜堂ニ入テ聖座ヲ汚穢シ祭壇
ヲ破毀シ其暴横至ラザルナシ之ガ爲メ僅カ三
日間ニ貴紳平民ヲ論ゼズ非命ノ死ヲ遂ル者甚
カ多シ射兵ハ其仇敵ナル年少ノ貴紳傷黃吉利
羅懷的那爾伊素金ヲ頻リニ搜索スト雖正遂ニ
之ヲ獲ルヲ能ハス蓋シ后其下ニ命シテ密ニ之
ヲ一所ニ潛匿セシメ何等ノ事故アリト雖正敢
テ人ヲシテ其隱所ヲ知ラシメザレバナリ然ト

彼得大帝傳
卷之十一

雖正暴徒ハ更ニ鎮定スルノ色ナク頻リニ呼テ
曰若シ其巨魁ヲ出サズンバ必ズ貴紳ヲ殲殺セ
ント喋々衆ヲ威懾セリ是ニ於テ貴紳及ビ皇女
索比亞之ヲ聞キ自ラ那達利亞吉利羅那ノ許ニ
來テ懇々之ニ説テ曰事此ニ及ブ速ニ射兵ノ需
メニ應シテ衆ヲ救フガ爲メニ我ニ魁首ヲ與ヘ
ラレヨ若シ早ク之ヲ鎮撫スルニ非ンバ恐クハ
其殘害衆庶ニ及バント此ニ於テ后ハ彼等ノ強
迫スル所トナリ歎歎涕泣シ其下ニ命シテ其愛
スル所ノ弟ヲ出シ之ヲ禮拜堂ニ送ラシム

彼得大帝傳
卷之十一

那爾

彼得大帝傳

伊素金其堂ニ入り己ノ罪過ヲ懺悟シテ聖躰聖
傳ノ兩機密ヲ領シ其胸間ニ聖母ノ畫像ヲ掛ケ
以テゾロヤレセカ金格子ニ出現セリ暴徒之ヲ望ミ直ニ其内
ニ亂入シテ之ヲ束縛シ拷問苦責實ニ其慘酷ヲ
極メタリ然レナ爾伊素金ハ昂然トシテ其苦
楚ヲ忍ビ敢テ一言モ發セズシテ沈黙セリ射兵
ハ益猛怒シテ之ヲ郊外ニ曳キ來リ爭テ刀ヲ揮
ヒ之ヲ寸斷セリ是ニ於テ暴徒等ハ血ニ塗レ酒
ヲ暴飲シテ心神恍惚タリ乃チ互ニ相言テ曰嗚
呼實ニ愉快ナラズヤ

皇女レ僚比ハ亞ハ其仇視スル所ノ巨魁既ニ殺害セ
ラル、ヲ以テ大ニ之ヲ祝賀シ厚ク射兵ヲ賞譽
セリ
彼得ハ女兄及ビ兄ト共ニニ朱階ニ在テ彼ノ亂入
騷擾セシ暴徒ノ前ニ出テ更ニ畏怖セズ泰然ト
シテ此事件ヲ目撃シ遂ニ額拉ヲ挪ヲ懷ヲ達ヲ亞ヲ巴ヲ拉ヲ達
ニ赴ケリ抑モ此射兵等ハ皆岐教ヲ奉スル者ナ
レバ其後數日ヲ經テ大教師ノ我等ノ如キ法ヲ
犯ス者ヲ誘導勸諭シテ正教ニ歸化セシムルト
ノ説ヲ聞キ大ニ洵々タリ依テ彼等ハ各手ニ石

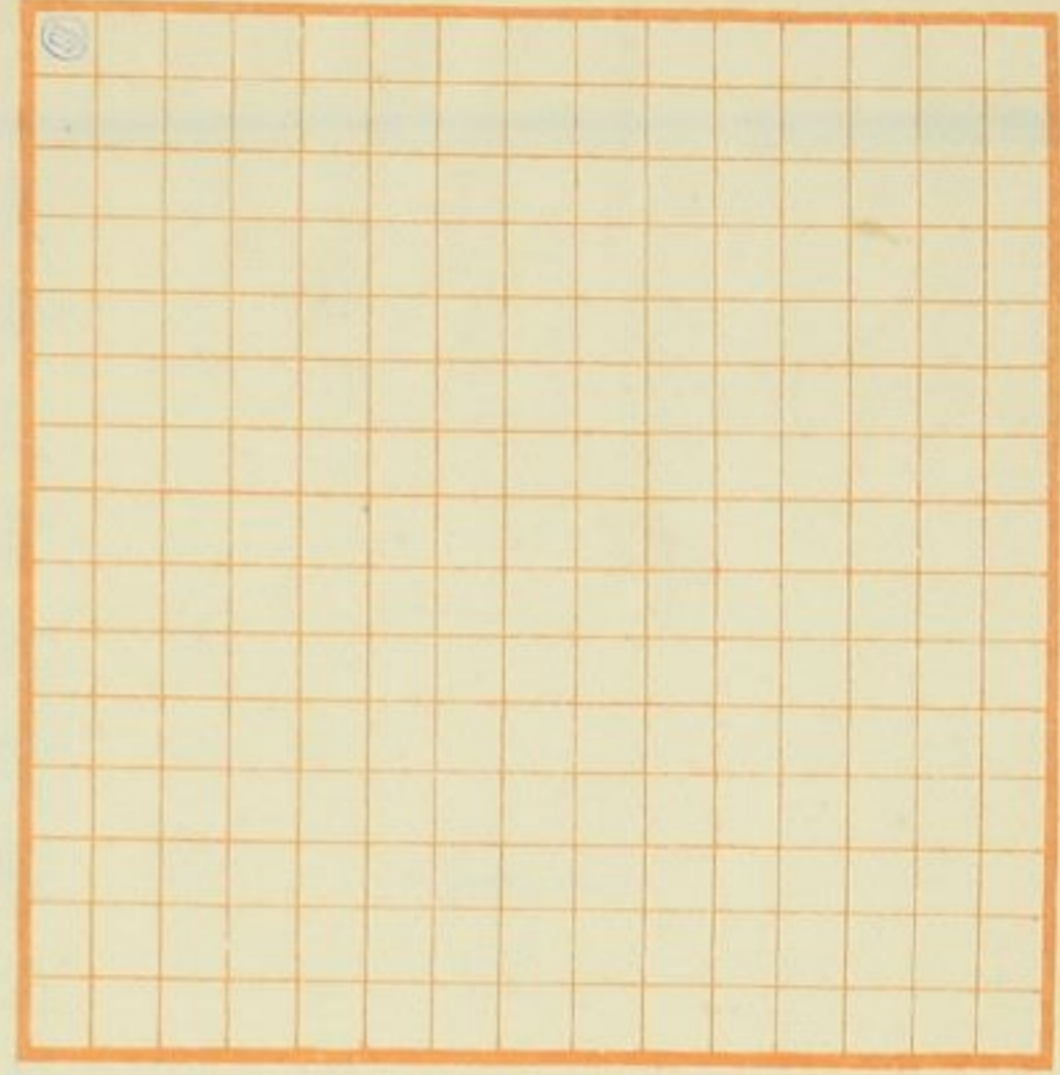
彼得大帝傳

ヲ携ヘテ額ヲ擲シテ懷達亞巴拉達ニ亂入シ之ヲ大
 教師ニ投擲セシガ幼王ハ泰然トシテ更ニ驚動
 セズ大教師ト暴徒ノ間ニ驅入シテ自ラ頭ヨリ
 其冠ヲ取り之ヲ示シ呼テ曰吾此冠ヲ載キ此世
 ニ生存スル間ハ岐教者ヲシテ聖堂ニ亂入シ且
 ツ正教ヲ以テ不正ト為スヲ許サズ我自ラ之ヲ
 保守スル中ハ稱シテ之ヲ毋ト云フ吾其真正ナ
 ルヲ信ズレバナリ衆モ亦斯ノ如クナルベシト
 顧ミテ從者ニ向ヒ言テ曰何ゾ徒ラニ佇立シテ
 此敵ヲ防禦セザルヤト從者皆奮フテ暴徒ヲ逐

ヒ遂ニ之ヲ殿外ニ退ケタリ

天子の御律本帝傳 卷之十一

5年4月



御代
九帝
傳

卷
之
上

三十五

終

彼得大帝傳續卷之上終

彼得大帝傳續

卷之上

三十五

